

野上 祐作

新年 雑感



昨年は東北地方で大震災が発生し、太平洋沿岸部を大津波が襲った。それに伴い大勢の犠牲者がでた。地震に対する対策はかなり進んでいたようで、聞くところによれば岩手県では地震による怪我人の報告はなかったとか。犠牲者はすべて津波によるものだ。津波に対する対策も行なわれてはいたが、今回の津波の規模は想定外であったという。

人間は地震や津波を阻止することはできない。自然災害とはそういうものなのだ。自然に対する畏敬の念を疎かにしないで、災害が発生したときに被害を最小限に食い止める対策を常に考えておかねばならない。

今回の大震災に付随して発生したもう1つの厄介な問題、福島原発の事故は大いに考えさせられる。さまざまな意見が噴出しているが、周辺に飛散した放射性セシウムに

ついての具体的な対策が考えられていなかったことだけは確かだ。

発生した低濃度の放射性物質を含んだ土壌、落葉などの除染作業は、取り扱いとしては比較的楽であるものの、その量たるや膨大である。それらを減量すれば高濃度の放射性廃棄物となり取り扱いが厄介になる。放射性廃棄物は他の廃棄物と違って、今のところ捨て場がない。地中深くに穴を掘って埋めるといっても限りがある。つまり、現場では高濃度の放射性廃棄物の最終処分方法が決まらない限り、放射性廃棄物をどの程度の濃度レベルに収めるかが大きなジレンマとなる。

核分裂により発生するエネルギーは限りなく魅力的であり、これを人類文明に利用しないのは愚かであると考えた輩が原子力の平和利用という名目で原発の開発に携わった。核燃料も使用したら当然廃棄物となるが、彼らはその廃棄物処理についてはそのうち考えればよいと見切り発車した。各原発で保管している使用済燃料棒がどんどん溜まっていく中で、「プルサーマル計画」とかを出して使用済核燃料の再

利用を行なおうとした。しかし、この計画は未だにうまくいかない。

そうまでして原子力の平和利用を進めなければならない理由はなんだろう。人類の将来のエネルギー問題を解決する切り札とするにはあまりにもお粗末である。科学技術の限りない発展を続けていけば解決できない問題はないという神話は、過去の環境問題の教訓を生かせば、既に崩壊している。

我々にエアコンなどの快適な生活を提供し、20世紀最大の発明品といわれたフロンガス(CFC)によるオゾン層破壊の問題を反省すれば、その優れたものの作り方と同時に壊し方を考えておくべきであった。ポリ塩化ビフェニール(PCB)然り。原子力村の人たちは、原発を稼動する際に、使用済核燃料の処分方法を同時に考えておくべきであった。

新年にあたって、様々な利害関係を超越して人類の英知を結集し、太陽、風、バイオマスなど、廃棄時の後始末の簡単な自然エネルギーの利用システムの開発普及をみんなと志向する年になることを祈念する。

野上 祐作氏

1943年生まれ

岡山理科大学理学部教授

岡山理科大学環境教育

地域支援研究会代表

(財)おかもやま環境ネット

ワーク理事

私立大学環境保全協議会

顧問等